

# 自己や集団のあり方に目を向け、互いに高めあおうとする生徒の育成 ～ 中学部修学旅行の実践を通して～

北京日本人学校 教諭 浦田文久  
鳥取大学附属小学校

キーワード：自己実現，集団づくり，現地理解

## 1 はじめに

現在の中国は、めざましい発展を遂げている。市場開放政策の中、世界の一大市場である中国へ外国の資本がどんどん進出している。古いものが壊され、新しいものが建築、生産されている。かつて中国といえば自転車を想像した人も多いと思うが、現在の北京の街は、自動車で溢れかえっている。朝夕の渋滞はすさまじい。また、オフィスビルやマンションの建築ラッシュももの凄い。高速道路や地下鉄の整備など交通網の整備も進んでいる。そして、2008年のオリンピック開催にむけてもさまざまな準備が進められている。歩道や街路樹など外国人を迎えるための準備も着々と進んでいる。

北京日本人学校は、北京市の中心である天安門広場からタクシーで北東に20分あまりの郊外にある。現在の校舎が建築された当時は、周辺にはほとんど建築物はなかったが、現在は大型のホテル、飲食店、マンション群が林立している。学校周辺だけを見ても、中国の発展が手に取るように分かる。今年度、本校は創立30周年を迎え、児童生徒数は、4月現在、小学部492名、中学部158名、計650名である。

私の所属する中学部は、各学年2学級の6学級である。8名の派遣教員で部の運営を行っている。中学部は、毎年1学期に中学部全体で修学旅行を行っている。今年度は、四川省の省都である成都方面へ出かけた。成都といえば、三国志に登場する劉備玄德の治めた蜀の国の都がおかれたところである。中学部全体で修学旅行を行うのは、学部全体の人数が少ないころからの慣例ではあるが、さらにねらいを設けて中学部全体で修学旅行に出かけている。どのようなねらいを設けて、どのような修学旅行を行っているのか実践を報告したい。

## 2 活動の実際

### (1) 事前の取り組み

#### ① 修学旅行オリエンテーション

新年度が始まると早々に修学旅行の準備が進む。まず、生徒に修学旅行先の説明（2・3年生には春休みの間に事前調べを新聞形式でまとめさせている。）を行い、旅行への意識を高めさせる。

さらに、修学旅行のねらいを説明する。特に新入生には、まだ中学部への所属意識が薄いので、ねらいをしっかりととらえさせる必要がある。そのねらいを以下に示す。

- ・ 修学旅行を通して、中学部全体の絆を深め、中学部全体が一つになって北京日本人学校のリーダーとして活躍する。
- ・ 集団生活を通して、自分の役割を見つけ、自己実現を図る。
- ・ 修学旅行を通して自己や集団のあり方に目を向け、互いに高め合う力を育てる。

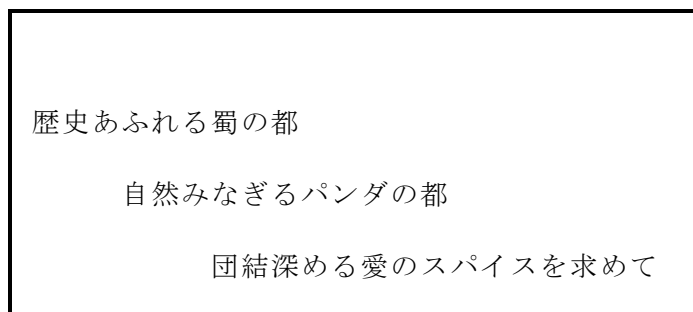
こうしたねらいを理解させた上で、中学部全体で修学旅行にのぞむ気持ちを高めた。ただ、異学年の生徒158名がすぐ一つになることは難しい。折りに触れ、ねらいについて話してきた。

#### ② 実行委員会の立ち上げ

生徒たちの手による修学旅行を行うには、実行委員会の存在が不可欠である。158名

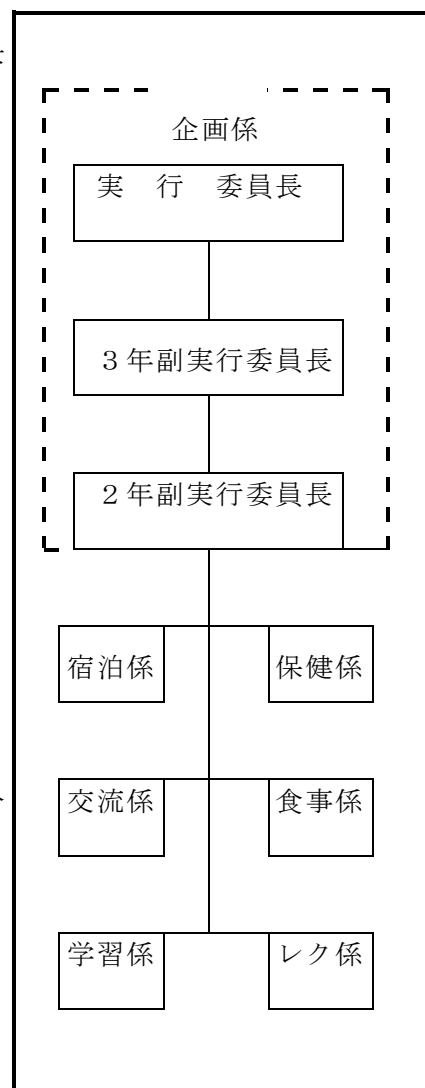
の意見を吸い上げながら、自分たちの修学旅行を創り上げていく機関である。3年生から実行委員長・副実行委員長各1名、2年生から副実行委員長2名、各学級から係6名を選出し、実行委員会を組織した。（右下の図が実行委員会の組織図）

実行委員会のはじめの仕事は、修学旅行のスローガン決めである。実行委員からキーワードを出してもらい、あとは実行委員会の中心である企画係がスローガンをつくっていった。その中で決められたスローガンは、



というものになった。修学旅行のねらいがこのスローガンの中に込められているのが分かる。

このスローガンを受けて、各係でもスローガンを話し合い、各係でしおりの作成に取りかかった。



### ③保護者説明会の開催

例年、4月中に保護者説明会を開催している。この説明会も企画係が中心となって進める。主に、日程の説明である。教師が事前調査で写してきた写真データを使って、プレゼンテーションを作成した。本校は安全管理上、放課後残って作業をすることができないので朝、昼などのちょっとした時間を活用しながら作り上げていった。当日も事前準備、司会進行、説明等をしっかり行うことができた。

### ④しおりの作成

修学旅行までの大きな仕事が、しおりづくりである。各係に振り分けた内容を係長が中心になって原稿を作成する。各係のスローガン、きまり、班分け、仕事などを書き上げていく。まさしく手作りのしおりである。こうした作業を通して修学旅行への意識が高まっていく。しおりができあがると、しおりを使っての事前学習を行う。事前学習では、各係長がそれぞれの内容を説明し、全体からの質問等を受け、全体でしおりの内容を周知できるようにしていった。その中で、全体の意見をまとめるために討論を重ねる場面もあった。例えば、ゲーム機の扱いである。本校では、明文化された規則はない。修学旅行も日常の生活に準じて実施する。「自己責任においてもっていてもいいのではないか。」という意見があった。これに対して「旅行のねらいに反するのではないか。」という意見が出され、ゲーム機の携帯は不許可となった。このように、話し合いを通してきまりをつくることで、自主的にきまりを守ろうという意識も高まっていった。

### ⑤交流活動に向けて

修学旅行の活動の中に国際交流という大きな行事がある。在外教育施設というときかん

に国際交流を行っていると思われるだろうが、実際には安全上の問題、相手校の問題（教育課程の違い、交流のねらいの違い、時期・時間の調整など）で、なかなか交流ができないのが現状である。その中で、修学旅行中の交流活動は、国際交流活動の大きなウエイトを占める。そこで、しっかりと事前準備のもと交流ができるようにしている。交流活動の中心となって活動するのは、交流係である。交流内容の相談、練習計画の作成、練習、当日の交流、こうした内容を進めていくのである。今回は、全体でのセレモニー、グループ交流、全体での発表という内容で交流を行った。本校の発表では、「朋友」という中国の歌を合唱することになった。指揮者・伴奏者を決め、朝・昼の休憩時間を利用して練習に取り組んでいった。相手校のイメージがまだない状態であるので、練習に身が入らないこともあったが、交流係が声かけを行っていく中で、少しずつ意識が高まりが見られるようになった。

#### ⑥教師のバックアップについて

話し合いや仕事については、基本的に生徒自身の手によって進めていった。教師はそれぞれの係の係長と連絡を取り合いながら、時間と場所の確保、困ったときの相談など生徒では解決できないことについてバックアップするようにした。前面に出ることはあまりせず、できるだけ生徒自身で修学旅行を創り上げることができるよう動きになるよう心がけた。

### （２）旅行の実際

旅行の実際については、生徒の活動やそれを通しての変容について記述していきたい。

#### ①実行委員会会議について

旅行中は、毎晩実行委員会会議を設けた。企画係が中心となって会議を運営していく。

はじめに一日を振り返りながら、その日の課題や改善されてきた点等を出していった。細かい内容から全体に関わる内容までさまざま出された。こうした課題をいくつかに集約して、その課題について解決策を話し合っていた。この実行委員会会議では、実行委員会の中でも特に中3の生徒が中心となって意見を出していった。中3にとっては、最後の修学旅行である。先輩たちが残していった伝統を後輩たちに伝えなければという使命感がある。もちろん中3としてリーダーシップを発揮したいという気持ちももっている。こうした気持ちが実行委員会での発言にも表れていた。実行委員会で話し合われた内容は、次の日のバスの中で全員に伝えられ、課題が改善されるようにしていった。ただ、旅行の前半では実行委員や3年生の気持ちが空回りしてなかなか下級生に伝わっていないように感じた。

#### ②生徒の変容について

旅行の前半は、ねらいにしていたような絆の深まりはあまり実現できているようには見られなかった。全体の人数が多く移動や整列に時間がかかる、話の聞き方が曖昧で意思疎通がうまく回れない、実行委員の思いばかりが先行する、そんな雰囲気であった。そんな中、時間がかかっても生徒たちで静かに集合させ、何らかの指示等を出させ、自分たちで集団を動かせるようにした。そうしているうちに2年生や1年生からもお互いに注意し合う声が出始めた。変容が明らかに見えたのは、3日目の夜、川劇という四川地方の雑伎を見るために集合したときである。その前に開かれた実行委員会の後、これまでの反省を生かして中3から10分間前集合を呼びかける声が出された。この声が全体に伝えられ、10分前行動が実現したのである。明らかに生徒たちの雰囲気が変わった。この機をとらえて、生徒たちに一言話をした。「今回の行動は、中3が自主的に呼びかけて実現したものである。この中3の心意気に拍手を送ろう。」と声をかけ、全員で拍手を送った。中3の表情は誇らしげであった。これ以降、中1・2の行動にも変化が出てきた。中3に言われる前に行動しよう、自分たちの学年は自分たちで行動できるようにしよう、そんな責任感が行動に表れてきたのである。

#### ③全体反省会について

4泊5日の修学旅行中、4日目の夜、恒例の全体反省会が開かれた。この反省会では、まず企画係が自分たちの修学旅行にかける思いを話したり、修学旅行を振り返ったりして、全体に向けてメッセージを送る。その後、中3全員が一言ずつ自分の思いを話していく。内容は、自分の修学旅行への取り組みの反省であったり、今後の運動会への取り組みの決意であったりであった。内容については、重なることが多かったが、一人一人が自分の言葉で話すことに大きな価値があった。だれが決めるともなく、思い思いの順に自主的に語っていくところが手前みそながらすば

らしいと思う。中1・2は、真剣な表情で先輩たちの言葉に耳を傾けていた。中3の言葉が終わったら、次は中2の番である。中3の言葉に応える形である。中2の生徒も自主的に自分の意見を述べていく。主に、「来年度は自分たちが修学旅行を創り上げる番である。北京日本人学校のリーダーにならなくてはいけない。」そんな内容が語られていた。中2は、時間の関係上、全員が話することはできなかったが、中3の思いを感じ取った発言が聞かれた。予定の1時間を過ぎても意見発表が続いた。次の活動の予定を30分ずらして反省会を続けた。この反省会の時間を通して修学旅行にかける中3の思いが全体で共有できたと感じた。そして、旅行の一番のねらいである「中学部全体の絆」が深まったと感じた時間であった。この時間を過ごすことが、修学旅行を中学部全体で取り組む意義とも言える。

#### ④交流会のようす

事前学習でもふれた国際交流について述べる。今回の交流相手は、成都市の「塩道街中学」であった。以前、日本の中学校と交流したこともある学校である。旅行3日目の午後が交流の時間であった。はじめに学校代表、生徒代表が挨拶を交わし、全体のセレモニーを行った。次には、生徒が7、8名のグループに分かれ、交流を行った。事前に用意した手作りの名刺を交換して自己紹介をしたり、ゲームをしたり、歌を歌ったりして交流を深めた。コミュニケーションの手段として、中国語や英語を使いながら何とか意思疎通を図ろうと工夫していた。はじめは堅い雰囲気であったが、だんだん笑い声を聞かれるようになり、交流が盛り上がっていった。1時間余りのグループ交流であったが、楽しい一時を過ごすことができた。ただ、いつも感じることであるが、楽しい一時を過ごすことは大切であるが、そこから先に進まなければ、本当の交流にはならないと感じている。これは国内の交流活動でも同様だと思う。国際理解を深めるための交流は、よほど回数を重ね、コミュニケーションをとらなければ互いの理解など深めることにはならないと感じる。大きな課題である。それはさておき、グループ交流も楽しいうちに終わり、最後は互いの発表の時間である。塩道街中学は、ミニオーケストラの演奏、民族の舞踊、現代の社交ダンスと華やかな発表が続いた。中国側の発表はいつもすばらしい。少数精鋭ですばらしい発表を見せてくれる。日本人学校は全員で参加する合唱である。このあたりにもお互いのお国柄が表れている。「朋友」を中国語で合唱した。塩道街中学の生徒もよく知っている曲なので、自然に口が動いていた。合唱後、もう一度全員で歌った。会場全体が一つになるような一体感を感じた。こうして交流活動は、大成功のうちに終了した。

#### (3) 旅行を終えて

5日間の旅行は、天気にも恵まれ、予定していた日程を全て終えることができた。(2)の中でもふれたように、中学部全体の生徒たちの絆は5日間を通して、深めることができたと思う。また、集団としても個人としても5日間の中に成長を感じられる場面が多く見られた。自分の役割を感じ、それを責任をもって果たそうとする姿が随所に見られた。生徒が旅行後に綴った文章を紹介する。

・ 修学旅行で学んだことは、友達の大切さ、集団行動の大切さです。中1-1が全員そろわないだけで、ほかの先輩や2組まで待たせてしまうからです。今回の修学旅行では、私たち中1が先輩たちに迷惑をかけてしまいました。来年の修学旅行では先輩のサポートをしっかりとしながら、きちんと後輩の面倒も見られる中2になり今年よりもさらにいい修学旅行になったらいいなと思います。友達の大切さは、友達がいたからこそ楽しみながら学べたんだと思います。（中略）私は、まず自分が静かにしてから、うるさい人がいたら注意するのを心がけようと思います。そうして一人一人が気をつければ静かになり、先輩たちが注意することもなくなるだろうし、計画がスムーズに進み、とても良いと思います。これは、もちろん修学旅行だけでなく、日常生活にも言えることなので私は普段から集団生活を大切に、皆の貴重な時間を奪わないように心がけようと決めました。これが修学旅行を通して見えてきた自分の課題です。（中1女子）

・ ぼくが学んだことは、集団行動についてです。みんなで集合するときに、ちゃんと並び、先生の話をもきちんと聞くことができました。自分で考えて行動するときが増えました。自分で考えて、人に言われる前に行動することができるようになりました。ぼくのこれからの課題は、自分のことだけではなく、周りのことを見て行動することです。今回の修学旅行では、自分のことだけで精一杯だったけど、次には周りのことに目を配っていきたいです。また、ぼくに必要なことは、人の話をしっかりと聞くことです。先生が大事な話をしているときに、一応聞いていたけど、聞き逃すこともありました。だからこれからは、全神経を集中してどんな人が話しているともきちんと話を聞きたいです。（中1男子）

### 3 おわりに

中学部全体で取り組んだ修学旅行。5日間を通して、中学部全体158名と教師8名の絆がより深まっていった。そして、一人一人が自分の役割を意識して、集団の力を高めていった。その変容のようすが私たち教師にも伝わってくる修学旅行であった。一番印象に残っていることを聞くと、「全体での反省会」を挙げる生徒が多かった。先輩たちが真剣に語りかける姿に感銘を受けた生徒が多かった。このことが中学部全体で修学旅行に行く意義を一番よく教えてくれている。